

多言語社会における教科教育 — 社会科教科書の文章理解に関する研究 —

早野慎吾¹⁾・松井洋子²⁾・小田原恵美子³⁾
宮田好恵⁴⁾・佐藤和之⁵⁾・田中利砂子⁶⁾

The Subject Education in Multilingual Society
— The Research on Text Understanding of the Social-Studies Textbook —

Shingo HAYANO・Yoko MATSUI・Emiko ODAHARA
Yoshie MIYATA・Kazuyuki SATOH・Risako TANAKA

1. はじめに

平成18年度以来、宮崎大学教育文化学部国語学研究室では、宮崎県宮崎地区および栃木県真岡市をフィールドとして外国人児童生徒および彼らを取り巻く環境(学校現場・教員・補助通訳など)や行政(教育委員会など)についての実態調査を行ってきた(井上・早野(2006)、松井・早野(2006)、松井・早野(2007a)、松井・早野(2007b)、佐藤・早野(2007)、松井(2008))。

それら一連の研究において、外国人児童少数地域(宮崎地区)および外国人児童生徒多数地域(真岡市)ともに、子どもたちが目標言語(日本語)の環境の中で生活していれば、言語習得はある程度自然に行われることが確認できた。しかし、各教科教育に関しては状況は大きく異なっており、教科教育に対応できる日本語能力が不足していると感じている外国人児童生徒が多かった。また多くの保護者も各教科の学習に十分対応できる日本語指導を望んでいた。そのような状況で日本語学習支援を行うためには、まず外国人児童生徒の日本語能力の実態を把握する必要がある。

学年にもよるが、教科に関しては社会科の難易度が高いという指摘が多い。白鳥(2000:p.136)では、「社会科は国語科とならんで、小学校の教科書の中で最も難易度が高いと思われる」と指摘している。また、工藤(1999:p.107)でも高学年の社会科について「児童が小学校での教育を受ける中で、最も難易度が高いと思われる語が含まれる文章」として扱っている。今回、そのように難易度が高いと指摘されることの多い高学年の社会科教科書に関する日本語理解度調査を行った。外国人児童と日本人児童の差異がもっとも出ると思われたからである。対象は小学5・6年生の外国人児童および日本人児童である。本稿では、その実地調査をもとに外国人児童と日本人児童の日本語力の違いを文章理解という観点から分析する(注1)。

1) 宮崎大学(研究代表者) 2) 宮崎公立大学非常勤講師 3) 宮崎大学院生

4) 小林市立三松小学校教諭 5) 真岡市立真岡西小学校教諭 6) 志學館大学非常勤講師

2. 調査概要.

調査は平成19年5月から7月にかけて栃木県真岡市内にある真岡西小学校・真岡小学校・真岡東小学校に在籍する外国人児童および日本人児童を対象に行った。調査対象者はFJB(Foreigners of Japanese Birth)児童21人、JSL(Japanese as a Second Language)児童18人、日本人児童40人(5年生20人, 6年生20人)の計79人である。JSL児童の母語はポルトガル語9人、スペイン語8人、タイ語1人で、すべて非漢字圏の話者である。在日期間は6ヶ月～12年1ヶ月までと幅広く、平均で4年3.8ヶ月である。FJB児童の保護者の母語はポルトガル語9人、スペイン語8人、タガログ語3人、ベトナム語1人である。さらに家庭で保護者の母語を使用することがあるFJB児童は21人のうち11人である。

調査項目には真岡市の小学5年生が社会科教科書として使用している『新編新しい社会5下』(東京書籍 平成18年度版)で日本の風土と大きく関係した単元「わたしたちの国土と環境」の「さまざまな自然とくらし」(p.30-47)を使用した。5年生の教材を使用したのは、真岡西小日本語指導担当教員の意見による(注2)。調査時において、5年生はこの単元を学習しておらず、6年生は学習済みである。調査は語彙調査と文章調査の2種類を行った。語彙調査は教科書p.40-41, p.46-47に使われている語彙、および他の頁で使用されている外来語6項目を追加した214項目(語彙)を抽出して、不理解語彙にチェックをつけてもらった。文章調査は文体のバランスを考慮し、教科書p.32-35, p.40-43, p.46-47の文章でわからない箇所にアンダーラインを引いてもらった。

3. 語彙の理解度

図1～図4は早野・松井他(2007)によるもので、調査結果から語彙の理解度を示したものである。文の理解度を分析するためには、語彙理解に関するデータが必要である。その文理解を妨げている要因が語彙の難易度によるものなのか、構文など、語彙以外の要因によるものなのかを知るためである。ここでは早野・松井他(2007)の語彙調査における結果を概略する。

JSL児童の60%以上が理解できなかった語彙は26語(項目)で、60%以上のFJB児童ができなかった語彙は7語、日本人児童では4語だけとなり、60%以上の児童が理解できなかった語彙は児童が日常生活では使用しない語彙である。ただし、日本人児童の場合、地理分野に関係した語彙だけなのに対して、JSL児童の場合、一般的な文章で使用される語彙が多く含まれる。つまり、日本人の場合、専門性の高い語彙を学習すればよいのだが、JSL児童の場合、その専門性の高い語彙を理解するための文章語も同時に学習しなくてはならない。このことが教科教育を困難にしている大きな要因のひとつと考えられる。

図1～図4から日本人児童は、ほとんどの児童が調査項目の語彙を共有しているが、JSL児童は共有していない部分が多いことが確認できる。これは、JSL児童がそれぞれ違った状況で日本語を習得していることを意味しているものと考えられる。このことはJSL児童に対する体系的な日本語教育の必要性を示している。調査を行った真岡市は日本語指導においては先進的といえる地域である(佐藤・早野2007)。しかし、この地域においても、このような状況なのである。多言語社会化する現代においては、学校教育の現場に日本語教育の専門的知識を有した人材が必要である。教科教育に専門的な知識が必要とされるように、日本語教育においても専門的な知識は必要である。

図2からは家庭環境の重要性が伺える。FJB児童と日本人児童は日本での居住経歴は同じで

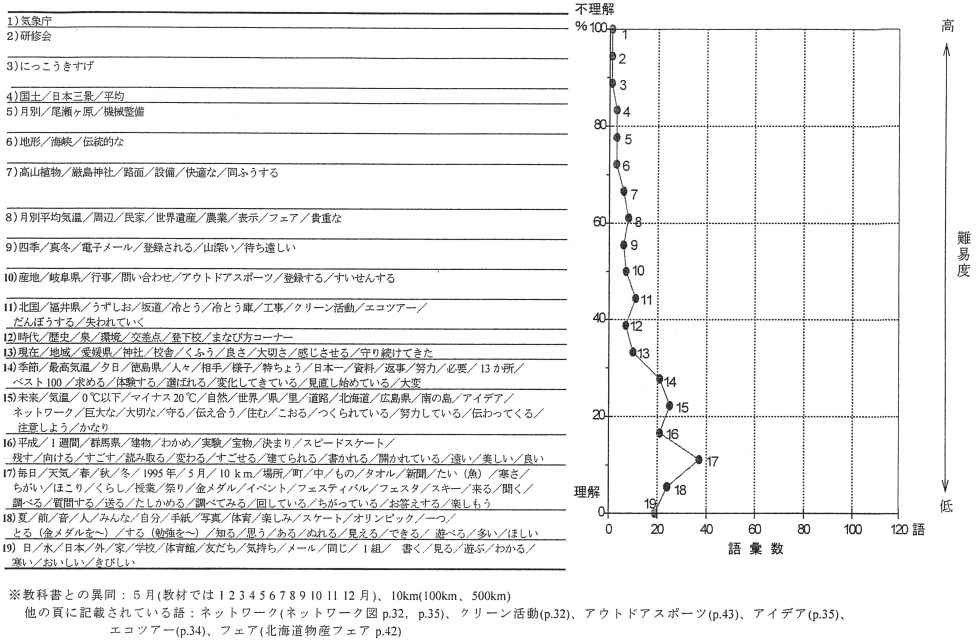


図1. JSL 児童 (早野・松井他 2008)

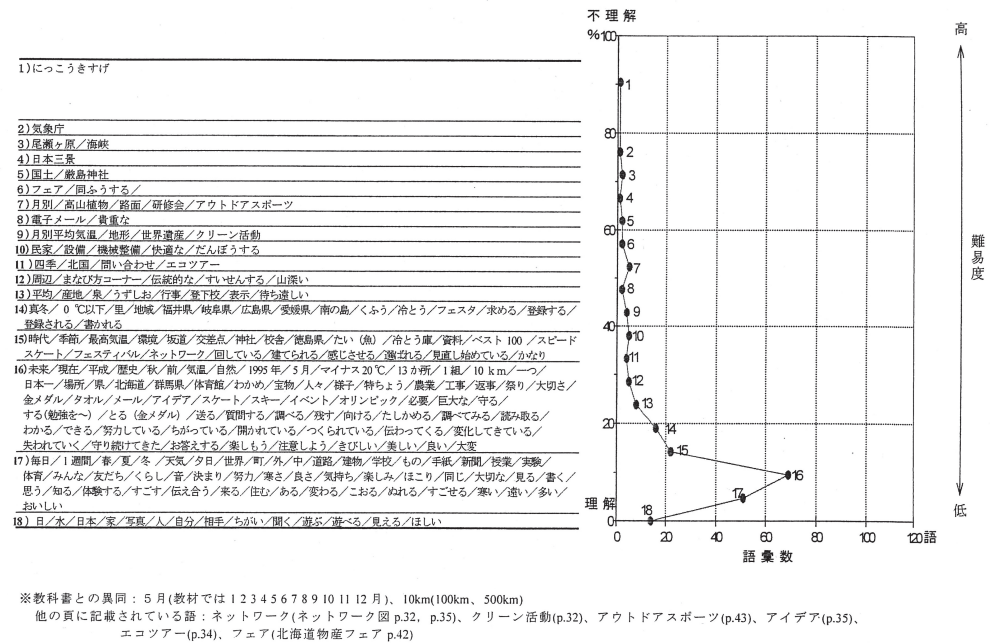
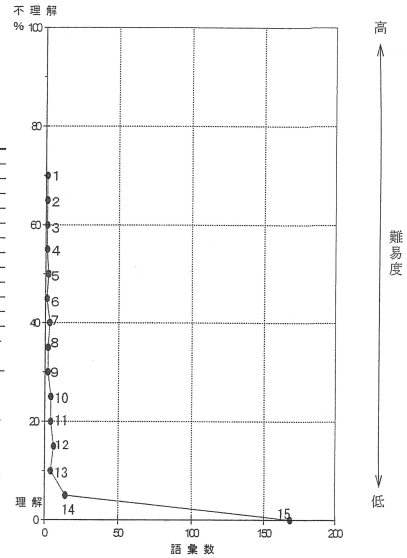


図2. FJB 児童 (早野・松井他 2008)

1) にっこりさすげ
2) 日本三景
3) 尾瀬ヶ原
4) 海浜
5) 気象庁/観島神社
6) 高山植物
7) 国土/回ふうする/山奥い
8) 世界遺産/機械整備
9) 北国/春暖か
10) うずしお/研修会/アウトドアスポーツ/だんぼうする
11) 路面/電子メール/フェア/快進
12) 月別/賞値/開い/合社/主なび方コーナー/クリーン活動/エコツアー
13) 地形/賞値/開かれてい/ネットワーク
14) 月別平均気温/ほこり/ベスト100/フェスタ/表示/伝説的な/見直し始めている/ある/すこせる/回している/書かれる/登録される/感じさせる/お答えする
15) 未来/現在/前/平成/日/毎日/時代/歴史/四季/季節/春/夏/秋/真冬/冬/天気/平均/気温/最高気温/0℃以下/マイナス20℃/1995年/5月/1週間/10km/1組/日本一/13か所/一つ/タ日/水/自然/環境/音/泉/世界/日本/泉/北海道/福井県/岐阜県/群馬県/広島県/徳島県/愛媛県/南の島/里/地域/町/場所/周辺/外/中/建物/家/民家/神社/学校/校舎/体育館/道路/坂道/交差点/もの/手紙/写真/新聞/たい(魚)/わかめ/宝物/資料/みんな/人々/人/自分/友だち/相手/くらし/行事/様子/持ちよう/授業/体育/実験/遊園地/工事/農業/祭り/市とう/冷とう/服/返事/努力/くふう/気持ち/決まり/ちがひ/楽しみ/寒さ/良さ/大切な/同じ/必要/巨大な/大切な/金メダル/タオル/アイデア/イベント/オリンピック/フェスティバル/スキー/スノーボード/スピードスケート/見る/かする(勉強を-)/書く/聞く/質問する/響べる/送る/とる(金メダルを-)/決す/求める/向ける/知る/登録する/すいせんする/守る/体験する/たしかめる/思う/すす/調べてみる/伝え合う/読み取る/来る/遊ぶ/住む/変わる/ぬれる/こおる/わかる/できる/見える/響べる/努力している/わがっている/聞かっている/選ばれる/つくられている/変化してきている/伝わってくる/失われていく/守り続けてきた/楽しもう/注意しよう/寒い/寒い/多い/多い/きびしい/美しい/良い/ほしい/待ちたい/大変/かたむ

※教科書との異同：5月(教材では123456789101112月)、10km(100km、500km)
 他の頁に記載されている語：ネットワーク(ネットワーク図 p.32, p.35)、クリーン活動(p.32)、アウトドアスポーツ(p.43)、アイデア(p.35)、エコツアー(p.34)、フェア(北海道物産フェア p.42)

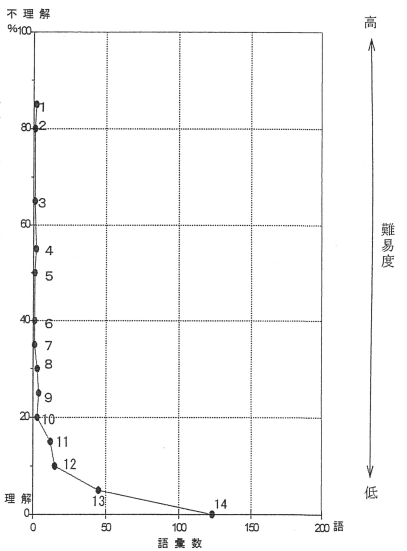
図3.日本人児童5年生(早野・松井他2008)



1) 日本三景/にっこりさすげ
2) 観島神社
3) 尾瀬ヶ原
4) 海浜/高山植物
5) 気象庁
6) 回ふうする
7) アウトドアスポーツ
8) 国土/研修会/フェア
9) 北国/路面/電子メール/主なび方コーナー
10) 四季/月別/開い/合社
11) 路面/機械整備/表示/だんぼうする
12) 月別平均気温/地域/岐阜県/徳島県/愛媛県/南の島/うずしお/泉/坂道/民家/登下校/0℃以下/マイナス20℃/ベスト100/ネットワーク/クリーン活動/貴重な/伝説的な/快進
13) 毎日/季節/真冬/里/奥/福井県/群馬県/広島県/愛媛/道路/歴史/建物/世界遺産/体育館/交差点/冷とう/里/たい(魚)/建物/資料/友だち/相手/ほこり/気持ち/努力/くふう/工事/メール/アイデア/イベント/フェスティバル/フェア/エコツアー/スピードスケート/1995年/10km/1組/もの(勉強を-)/求める/見直し始めている/わがっている/書かれる/失われていく/守り続けてきた/大変/かたむ
14) 未来/現在/前/平成/日/時代/春/夏/秋/冬/天気/平均/気温/最高気温/タ日/自然/地形/環境/音/世界/日本/北海道/町/場所/周辺/外/中/家/民家/神社/学校/校舎/もの/わかめ/手紙/写真/新聞/返事/授業/体育/実験/農業/祭り/市とう/冷とう/みんな/人々/自分/くらし/行事/決まり/様子/持ちよう/タオル/スキー/オリンピック/金メダル/5月/1週間/日本一/13か所/一つ/ちがひ/良さ/大切な/寒さ/楽しみ/祭り/必要/同じ/巨大な/大切な/書く/見る/聞く/送る/質問する/響べる/守る/とる(金メダルを-)/知る/決す/向ける/すす/登録する/たしかめる/体験する/調べてみる/読み取る/思う/遊ぶ/住む/来る/ある/変わる/こおる/ぬれる/わかる/できる/見える/響べる/努力している/わがっている/聞かっている/選ばれる/つくられている/変化してきている/伝わってくる/失われていく/守り続けてきた/楽しもう/注意しよう/寒い/寒い/多い/多い/きびしい/美しい/良い/ほしい

※教科書との異同：5月(教材では123456789101112月)、10km(100km、500km)
 他の頁に記載されている語：ネットワーク(ネットワーク図 p.32, p.35)、クリーン活動(p.32)、アウトドアスポーツ(p.43)、アイデア(p.35)、エコツアー(p.34)、フェア(北海道物産フェア p.42)

図4.日本人児童6年生(早野・松井他2008)



あるが、語彙習得に大きな違いがある。日本人は理解しているが、FJB 児童の20%以上が不理解である語彙には「季節／真冬／周辺／行事／校舎／交差点」などがある。家庭での保護者との会話で使われると思われる語彙が多く含まれている^(注3)。保護者との日常会話が、児童の言語能力に大きく影響していることがわかる。

4. 教科書教材の文

表1は教科書教材『新編新しい社会5下』p.40-41、p.46-47に記載されている文である。図5は『新編新しい社会5下』p.46である。本教材は、本文のように図や表、映像を伴わない文(以降、図なし文)と図や表、映像を伴った文(以降、図あり文)とがあるが、両者は文体が異なる。本文などは会話体でわかりやすい表現が用いられており、文字も大きく読みやすい。それに対して図や表、映像を伴った文は固有名詞が多く使われている説明文である。表2は文章調査の結果で、わからないと反応した文(不理解文)と句(不理解句)の数である。ここでの不理解文とは、文全体か、もしくはすべての自立語にアンダーラインを引いたものである。不理解句とは、二つ以上の連続する自立語にアンダーラインを引いたものである。

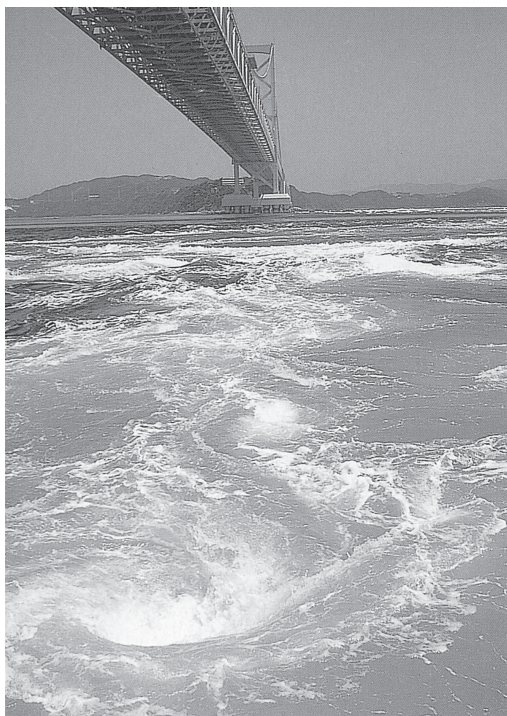
表1 教科書文

(01) 寒さのきびしい十勝地方
(02) 冷とう庫の中とほぼ同じマイナス20°Cのきびしい寒さの中で、陸別町の冬祭り「しばれフェスティバル」が開かれています。
(03) 寒い冬を楽しもうという北国の人々の気持ちが伝わってきます。
(04) 「道路は、こおったりしないのかな。」
(05) 毎日の登下校は大変だろうな。」
(06) 「真冬でも家の外で遊べるのかな。」
(07) 体育の授業はどうするのだろう。」
(08*) ひとみさんたちは、電子メールを送って質問することにしました。
(09*) 「日本一寒い町」と書かれた表示
(10*) しばれフェスティバルとしばれ君
(11*) [気象庁資料]石垣市と陸別町の月別平均気温
(12*) 寒い冬を過ごすために、人々はどのようにふうをしているのでしょうか。
(13*) タオルの冷とう実験
(14*) ぬれたタオルを回していると、寒さでこおってしまいます。
(15*) 帯広氷まつり(帯広市)
(16*) ロードヒーティングの工事(帯広市)
(17*) 北海道から日本が見える
(18*) あなたの県の冬の行事を調べてみましょう。
(19) まなび方コーナー
(20) 調べて返事を書く
(21) 遠くの学校の友だちから、手紙やメールで地域の様子の問い合わせが来たとき には、
(22) ・相手が何を知らがっているのかをきちんと読み取る。
(23) ・見たり体験したりしたことは、そのまま書く。
(24) ・聞いただけのことやよくわからないことは、多くの人にたしかめてから書く。
(25) ・写真や新聞など、自分たちもほしいなと思うようなものを同ふうする。
(26) などのことに注意しよう。
(27) お答えします
(28) (5年1組三村洋平)

(29) こんにちは。
(30) この1週間ずっと最高気温が0°C以下の毎日です。
(31) でも家の中や校舎、体育館はしっかりとだんぼうしてあるので快適にすごせます。
(32) 真冬でも路面がこおらないようにする/ロードヒーティングという設備のある交差点や坂道もあります。
(33) 天気の良い日にはスキーやスケートをして遊びます。
(34) バルーンフェスタや帯広市の氷まつりのような十勝らしい冬のイベントも楽しみます。
(35) オリンピックのスピードスケートで金メダルをとった/清水選手は、十勝のほりです。
(36) 「この寒さでは農業はできないね。」
(37) 機械整備や研修会などをするんだ。」
(38) 「春が待ち遠しいだろうな。」
(39) 夏の十勝は、どんな様子なんだろう。」
(40*) 春の鳴門海峡 (徳島県)
(41*) 巨大なうずしおを見ることができます。
(42*) 海峡の周辺は、たいやわかめの産地となっています。
(43*) 夏の尾瀬ヶ原 (群馬県)
(44*) につこうぎすげなどの貴重な高山植物を守るために、きびしい決まりがつけられています。
(45*) 美しい自然と大切に暮らしを守るために、どのような努力が必要でしょうか。
(46) 美しい日本のわたし
(47) 「わたしたちの国には、はっきりとした四季があるのね。」
(48) 「季節によって、暮らしの様子もずいぶんちがっていたね。」
(49) 「同じ季節でも、北国と南の島とではかなりのちがいがあったよ。」
(50) 「暮らしが変わることで、自然の良さが失われていくこともあったよ。」
(51) 「暮らしの様子は、時代によって変化してきているんだね。」
(52*) 特ちょうある地形の東尋坊 (福井県)
(53*) 秋の宮島 (広島県)
(54*) 840年ほど前に建てられた厳島神社は、世界遺産に登録されています。
(55*) 日本三景の一つです。
(56*) 冬の白川郷 (岐阜県)
(57*) 山深い里に住む人々が守り続けてきた伝統的な合掌づくりの民家は、1995年(平成7年)、世界遺産に登録されました。
(58) 日本には13か所(2005年)の世界遺産があります。
(59) 世界の人々とともに守りたい貴重な自然や歴史のある建物が登録されています。
(60) また、おいしい泉の水、夕日の美しい場所、季節を感じさせる音など、未来に残したい日本の"宝物ベスト100"も選ばれています。
(61) 「みんなが、国土と環境の大切さを見直し始めているんだね。」
(62) 「より良い暮らしを求め、より良い環境に向けて、努力している人々のことをもっともっと知りたいな。」
(63*) 夕日が美しい町の一つに選ばれた愛媛県双海町(現在の伊予市双海町)
(64*) あと一つ、世界遺産に登録するとしたら、あなたは、どこの何をすいせんしますか。

* 番号は図、表および映像がある文

図5『新編新しい社会5下』p.46



④春の鳴門海峡(徳島県) 巨大なうずしおを見ることが出来ます。海峡の周辺は、たいやわかめの産地にもなっています。



④夏の尾瀬ヶ原(群馬県) につこうきすげなどの貴重な高山植物を守るために、きびしい決まりがつけられています。

美しい自然と大切に暮らしを守るために、どのような努力が必要でしょうか。

美しい日本のわたし



「わたしたちの国には、はっきりとした四季があるのね。」



「季節によって、暮らしの様子もずいぶんちがっていたね。」

5



「同じ季節でも、北国と南の島とでは、かなりのちがいがあったよ。」



「暮らしの様子は、時代によっても変化してきているんだね。」



「暮らしが変わることで、自然の良さが失われていくこともあったよ。」

10



④持ちょうある地形の東尋坊(福井県)

表2 不理解文と句の数

文番号	JSL児童		FJB児童		日本人5年		日本人6年		文番号	JSL児童		FJB児童		日本人5年		日本人6年		
	文	句	文	句	文	句	文	句		文	句	文	句	文	句	文	句	
01		1							33		1						2	2
02		5	2	5		2	1	4	34		3		3		3	2	5	
03	2	4	1	1				1	35		3		3		3	2	6	
04	2	2	1	1					36			1	1					
05	2	5	1	1					37		5		4				1	3
06	2	3	1	1					38		2						1	1
07	2	3	1	1					39		1				2	1	1	
08*	1	2	1	2			1	2	40*	1	2	1	5	1	3	1	5	
09*	2	2	2	3	2	2	1	1	41*	1	1						1	1
10*			2	2			3	3	42*	2	2		2		2	2	3	
11*	3	3	2	5	1	3			43*	1	1		3				1	4
12*	1	2	1	2					44*	1	3		5		3			
13*	2	2	2	2	1	1	2	2	45*	1	2		2					
14*	2	4	2	4			2	2	46	1	1	1	1					
15*			1	1	1	2	1	1	47		3						2	2
16*			2	3	2	5	2	1	48		3						1	1
17*			1	1					49		6		3				1	3
18*	1	1	1	1					50		3						1	1
19									51		4						2	2
20	1	1							52*		1		2				1	2
21		1							53*	2	2		2					1
22		2							54*	1	3		1					
23									55*	1	1							1
24									56*	2	2	1	1					2
25		2						1	57*	1	4	1	9		2			2
26									58	1	3							
27									59		6		2					
28									60		10		1		1	1	9	
29									61		6		1		1	1	2	
30		1							62		7		3				1	4
31							1	2	63*	2	2	1	4		3	2	3	
32		7		3			1	5	64*	3	7	1	1					

JSL児童 n=13 FJB児童 n=19 日本人5年生 n=20 日本人6年生 n=20

教科書が読めるレベルに達していない話者を削除した。

*図、表および映像がある文

表2では、図や表、また映像がある説明文(番号09～14、40～43、52～57)の方がわからないと判断されている割合が多い。図や表は、その読解に知識が必要であり、映像は児童にとって理解が困難な内容(鳴門海峡、うずしお、尾瀬が原、宮島、白川郷など)の場合に使用される。つまり、図あり文は図なし文よりも基本的に難易度は高くなる。

日本人児童5年生は文と句ともに不理解とするものが6年生よりも少ない。5年生は、調査項目の単元はまだ学習していないが、6年生は既に学習済みである。当然結果は逆になると考えられる。これは、各グループの話者数が20名程度と人数的に少ないための誤差とも考えられるが、回答状況から、理解できると判断する基準が異なっている可能性がある。日本語能力

の低い児童は、漢字が読めれば内容がそれほど理解できていないのに理解できていると判断する傾向があるのに対して、日本語能力の高い児童は、漢字が読めても内容を十分に理解できていないと理解できていないと判断する傾向にあった。今回は理解できていない箇所アンダーラインを引くという調査法を用いて、それ以上の詳しい調査を行わなかったが、アンダーラインを引かなかった箇所(つまり理解できたと判断した箇所)が、どの程度理解できているのかを詳しく調査する必要がある。

5. 教科書教材の文の特徴

5.1. 不理解文と不理解句

表1の不理解文および不理解句の調査結果を、大きく次のように分類する。まず、① JSL 児童、FJB 児童、および日本人児童すべてのグループに不理解が目立つもの、② JSL 児童、FJB 児童の不理解が目立ち、日本人児童はほぼ理解しているもの、③ JSL 児童、FJB 児童は理解しているが、ある日本人児童の不理解が目立つもの、④ JSL 児童・FJB 児童・日本人児童のほとんどがほぼ理解しているものである。その他の分類も可能であるが、本稿ではこれら4つの項目について分析する。

① JSL 児童、FJB 児童、および日本人児童に不理解が目立つもの

この項目は、既に述べたように図あり文に多い。語彙調査の結果(図1～図4)において、JSL 児童の60%が不理解となってる語彙は26項目、FJB 児童は7項目、日本人児童は4項目であった。これらの語彙はほぼ全てが図あり文に使用されており、児童たちが日常生活では使用しない専門性と難易度の高いものである。まず、これが理解を難しくしている要因の一つであるが、これが社会科教科の特徴といえる要素でもある。

図あり文で記述されている内容の多くは日本独特の概念や社会通念、日本の習慣や日本事情に関するものである。しかし、それらは文字の大きさも小さく、本文の補助として位置づけられている。つまり、理解されるべき中心として扱われるのではなく、本文の流れを理解する補助的な要素として提示されている。このような扱い方では、学習すべき内容と意識されにくいのではないかと考えられる。

② JSL 児童、FJB 児童の不理解が目立ち、日本人児童はほぼ理解しているもの

この項目の特徴は、表1の文04～07などに見られる。これらは会話体であり、さらに「～大変だろうな」「～遊べるのかな」などのように日常会話に用いられる特徴的な終助詞が付いた表現が使用されている。文体の使い分けに慣れている日本人にとっては気にならないことであるが、文体の使い分けに慣れていない非日本語話者にとって、複数の文体を使用することは、文理解を困難にする要因となる。横田・小林(2004:p.114)では「一つの教科書の中に書き言葉、話し言葉、丁寧体、普通体というように、いくつかのスタイルが使用されている。これは日本語母語話者である日本の子どもたちには教科書に親しみを持たせることになると思われるが、非母語話者の外国人児童にとっては複雑でわかりにくいことになる」と指摘している。親しみやすさで児童に興味を喚起するには効果的ではあるが、多くのスタイルが入れ替わることで混乱が生じるため、文章表現という面においては難があるといえる。また文章語を学習する機会

を減らすことにもなり、言語能力の育成という面においても難がある。

③ JSL 児童、FJB 児童は理解しているが、ある日本人児童の不理解者が目立つもの

文 33～39 では、会話文にもかかわらず、②とは異なった結果になっている。また文 31～39、47～52、60～62 は説明文であるが、特に日本人 6 年生に文、句ともに不理解としている話者が目立つ。ここでは複文が多く見られ、さらに複合格助詞、アスペクト、連用中止形、連体修飾節、引用、副詞、形式名詞などの文法項目が複合的に用いられているため、文理解をさらに難しくしていると考えられる。しかし、JSL 児童、FJB 児童、および日本人 5 年生は不理解句は多いが、不理解文はほとんどない。授業で既に学習済みで理解できているはずの日本人 6 年生に不理解文が多い。これは、既に述べたように、日本語能力の高さによって理解しているとする判断基準が異なることによるものと考えられる。日本語力がある程度のレベルに達していない場合、単語レベルで意味を理解しており、文そのものがわかっていないことに気づいていない。それに対して、ある程度の日本語力に達していると文全体の意味を理解しようとするものと考えられる。例えば、文 60 「また、おいしい泉の水、夕日の美しい場所、季節を感じさせる音など、未来に残したい日本の“宝物ベスト 100”も選ばれています。」においては、決して難易度の高い語彙が使われている文ではない。しかし、文学的で抽象的な文となっており、これを十分理解するにはある程度の基礎概念が必要である。「季節を感じさせる音」は難しい語彙がないのでわかったつもりになるが、日本語能力の低い話者では、具体的にどのような音かを説明することは難しい。

④ JSL 児童・FJB 児童・日本人児童のほとんどが理解しているもの

文 19～30 では、毎日の学校生活の中で、また授業でよく使用される内容や言い回し、教師からの指示などに用いられる語からなる文である。これらは、児童たちが日常よく親しんでいるために理解できているものと考えられる。

5.2. 一文に使われる単語数

前述の語彙調査では語彙の難易度の高さが児童の理解を妨げていることが明らかとなった。ここでは、一文中に使用されている単語数(自立語)が文理解にどの程度影響を与えているかを見てみる。表 3 は自立語の数と不理解文の数を表したものである。

文が長くなれば理解が難しくなることが予想できるが、今回用いた調査文に関しては、一文で使用されている単語数と文理解はほとんど関係ないといえる。逆に単語数の少ない図あり文の理解が低い場合も多い。今回使用した教科書文においては、文の長さよりも、語彙の難易度が文理解に大きな影響を与えているといえる。ただし、文の理解度には判断基準が違うことが予想できるので、より日本語能力の高い話者を調査した場合、違う結果になることも予想できる。

表3 自立語の数および不理解文の数

文 番 号	自立語 の 数	不理解文の数				文 番 号	自立語 の 数	不理解文の数				
		JSL 児童	FJB 児童	日本人 5年	日本人 6年			JSL 児童	FJB 児童	日本人 5年	日本人 6年	
01	3					33	6					2
02	12		2		1	34	8					2
03	8	2	1			35	7					2
04	3	2	1			36	4		1			
05	3	2	1			37	3					1
06	4	2	1			38	2					1
07	4	2	1			39	4					1
08*	6	1	1		1	40*	3	1	1	1		1
09*	4	2	2	2	1	41*	5	1				1
10*	2		2		3	42*	6	2				2
11*	4	3	2	1		43*	3	1				1
12*	7	1	1			44*	7	1				
13*	2	2	2	1	2	45*	8	1				
14*	6	2	2		2	46	3	1	1			
15*	2		1	1	1	47	6					2
16*	3		2	2	2	48	5					1
17*	3		1			49	7					1
18*	5	1	1			50	5					1
19	1					51	9					2
20	3	1				52*	5					1
21	10					53*	3	2				
22	5					54*	6	1				
23	6					55*	2	1				
24	9					56*	3	2	1			
25	8					57*	14	1	1			
26	2					58	4	1				
27	1					59	8					
28	2					60	16					1
29	1					61	5					1
30	6					62	14					1
31	10				1	63*	9	2	1			2
32	11				1	64*	9	3	1			

JSL児童 n=13 FJB児童 n=19 日本人5年生 n=20 日本人6年生 n=20

(1) JSL児童に関しては、教科書が読めるレベルに達していない話者を削除した。

*図、表および映像がある文

8. おわりに

本稿では、教科書に使用されている文の理解度について分析した。今回は、調査方法の関係から概略的な分析で止めておいた。詳細な文型や構文などの要因を分析するためには、より詳しい調査データが必要である。今後は、理解できていると判断された内容がどの程度理解できているかなどを精査して、文理解における文型や構文に関する詳細な分析を行う必要がある。

【注】

- 1) 早野・松井他(2007)では、語彙を中心に分析した。本稿では、文単位の理解度を中心に扱う。なお、調査においては、真岡西小学校でハロールーム(日本語指導教室)担当の佐藤が中心に行った。
- 2) 真岡西小学校の日本語指導担当教員4人に、JSL児童に対する指導において、もっとも困難を伴う学年と学科を確認したところ、5・6年生の社会科という回答があった。授業についてこれられない児童が急激に増加するとのことである。
- 3) 日本生まれであるために特別な言語教育は必要ないと考えられがちであるが、早野・松井他(2007)ではJSL児童よりも深刻な状況に面しているFJB児童もいることが確認できた。

【参考文献】

- 井上佳代・早野慎吾(2006)「外国人児童に対する教育支援の現状-宮崎地区の調査から-」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』14
- 工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房
- 工藤真由美・木幡智美・玉井裕子(1999)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査-教科書の語彙との比較から」『国文学 解釈と鑑賞』64-1 至文堂
- 国立国語研究所(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表』大日本図書
- 佐藤和之・早野慎吾(2007)「マイノリティ言語話者への教育支援-JSL児童生徒多人数地域での取り組み-」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』17
- 佐藤尚子(2003)『日本語を母語としない児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査-小学校理科教科書を対象として-』科研費報告書
- 白鳥智美・玉井裕子・小澤容子・樋口万喜子(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査-小学校社会科教科書の語彙-」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 中尾桂子(1999)「小学校検定教科書の構文調査-外国人児童の教科学習支援のための基礎研究-」『日本語教育研究会論文集』7
- 西谷まり(2000)「小学校社会科教科書の語彙と表現-日本語能力試験レベル及び外国人児童生徒のための日本語教科書との対象-」『一橋大学留学生センター紀要』3
- 早野慎吾(2006)「教養としての日本語-国語の学力について-」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践センター-研究紀要』14
- 早野慎吾・松井洋子・田中利砂子・宮田好恵・小田原恵美子・永田剛(2007)「外国人児童における社会科教科書の日本語理解-栃木県真岡市における調査から-」『第53回中部言語学会要旨』
- 松井洋子・早野慎吾(2006)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究-宮崎地区の現状と課題-」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』15
- 松井洋子・早野慎吾(2007a)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究(2)-保護者と家庭環境の調査から-」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』16
- 松井洋子・早野慎吾(2007b)「年少者に対する日本語教育支援の研究(3)-コミュニティにおけるJSL日本語支援モデルの構築-」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』17
- 松井洋子(2008)「多言語社会化する学校教育に求められる役割」『宮崎地域文化研究会』2
- 横田淳子・小林幸江(2005)「外国人児童の教科学習のための日本語指導文型」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』31

(文責 松井洋子 早野慎吾)